

# 社会福祉学部 点検・評価報告書

## 1. 入学者選抜に関する点検・評価（要約版）

入学者選抜に関する点検・評価にあたって、入学者受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）を踏まえて検証した。

選抜方法は、大別して4種—AO入試、推薦入試（ボランティア入試を含む）、試験入試、大学入試センター試験利用—あるが、それぞれについて、選抜した結果の検証を行った。

その結果、本学部の受験者の傾向は、もっぱら学力中心の受験勉強より、高校における学習や意欲を評価する推薦型の希望が多いことが判明した。

さらに、入学者の入学後の学修状況の追跡調査も行った。学修成績、資格試験合格率、就職状況等の観点から追跡・検証した。

その結果、本学部の目的はおおむね達成されていると考えられるが、しかし、検証の過程で、なお次の2点のような課題が見出された。

- （1）AO入試と推薦入試で入学した学生たちの学力向上を図ること。
- （2）国家試験の合格率を上げること。

## 1. 入学者選抜に関する点検・評価

### はじめに

本学部の入学者選抜のありかたについて、入学者受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）を踏まえて検証する。

### 1-1 入学者選抜について

#### 【アドミッション・ポリシー】

社会福祉学部のアドミッション・ポリシーは、建学の精神である「畏神愛人」（人間尊重）の立場から、子どもからお年寄りまであらゆる人が抱える生活課題に強い関心を持ち、その問題解決のために必要な専門的知識を身につけた人材、および健康や美しいもの、崇高なものに対する正しい知識や価値観を持つ人材を育成することを基本の方針として、そのために、具体的には以下のような学生を求めている。

- (1) 高等学校において、学習を通じて基礎的な能力を身につけた人
- (2) 社会に起こる様々な問題を正しく捉え、その解決に向けて自ら考え、判断し、表現できる力を身につけた人
- (3) 生活の中で培ってきた人間性や協調性を入学後も発展させ、社会福祉の専門的技術を習得して社会に貢献したいという意欲を持つ人

#### 【選抜方法】

選抜方法としては大別して、AO入試、推薦入試（ボランティア入試を含む）、試験入試、大学入試センター試験利用入試の4種を設定している。これらを組み合わせて多様な資質を持つ人を求めている。ポリシーと入試形態との対応関係は単純ではないが、おおむね次のように関連付けられる。

ポリシー（1）は、試験入試や大学入試センター試験利用入試に反映し、高校での学習学達成度の状況を見る。ポリシー（2）は、AO入試、推薦入試（ボランティア入試を含む）に反映している。ポリシー（3）も、AO入試、推薦入試（ボランティア入試を含む）に反映しているが、とくに推薦入試のボランティア入試に力点を置くなどの工夫を施している。

### 1-2 選抜の結果とその検証

上記の方針のもとに、選抜した結果を検証してみたい。

2019年度卒業者（2016年度の入学者で、40人）は35人であるが、入試形態別では、AO入試4人、推薦入試19人、一般学力試験入試3人、センター試験利用入試9人である。本学部の場合AO入試と推薦入試の合計が23人、それに対し一般学力入試とセンター試験入試の合計が12人である（残り5人は留年）。ここから言えることは、本学部の受験者は学力一辺倒の受験勉強をして入学するというよりは、高校時代の学習や意欲を評価する推薦入学を希望していると言える。

### 1-3 入学後の状況、追跡調査

これらの入学者が、入学後どのような経過を辿ったか、その追跡を行った。

2019年度に卒業した学生のうち、AO入試で入学した学生の75%が成績下位層に属していることが分かった。推薦入試では0%、センター入試では11.1%が下位層である。また、4年間で卒業できなかった5人のうちAO入試が2人、推薦が3人、一般が0人、センター利用者が0人である。

次に、国家試験合格者11人の内訳を見ると、AO入試が1人、推薦が4人、一般が3人、センター利用が3人である。

上記のことから、次のようなことが言えよう。

AO入試、推薦入試で入学したグループより入試、センター利用入試のグループの学生の方が入学後の学修意欲が高く、国家試験の成績が良い。しかしながら、国試を逃した学生でも福祉関連企業に就職している学生も一定数おり、地域への人的貢献はしている。

また、教職資格取得者もおり、中学社会が5人、地歴が1人、高校公民が1人、特別支援が1人である。

なお、授業科目成績の評価指標としてのGPAに関しては、2019年度の卒業生は、ポイント「0~1.0」が0人、「1.0~2.0」が9人、「2.0~3.0」が20人、「3.0~4.0」が7人であり、平均的な割合である。

### 1-4 まとめと課題

本学部の入学者選抜の目的はおおむね達成されていると判断される。

しかし、検証の過程で、なお次の2点のような課題が残っている。

- (1) AO入試と推薦入試で入学した学生たちの学力向上を図ること。
- (2) 国家試験の合格率を上げること。

### 資料

- ① 「2019年度 新入生リトリートの実施による建学の精神の学び、学修支援の効果に関する調査分析」
- ②-1 「2019年度 入試選抜方法の妥当性検証に関わる入学生の追跡調査（2011年度から2018年度卒業生対象）」
- ②-2 「2019年度 入試選抜方法の妥当性検証に関わる入学生の追跡調査 「卒業生の入試形態別国家試験合否、ドロップアウト、就職実績に注目して」—コース制導入初の2019年度（2020年3月）卒業生対象—

## 2. 教育課程・カリキュラムに関する点検・評価（要約版）

### 【実績】

教育課程・カリキュラムのあり方について、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）を踏まえて検証した。

社会福祉学部のカリキュラム・ポリシーに則り、カリキュラム編成上、4つの特色を設けた。4つの特色とは、オーダーメイド教育、福祉の理論と実践、演習・実習の強化、コース制である。

この結果として、国家試験合格率が上昇したこと、これと連動して受験成績が急上昇したことなどが挙げ上げられるが、この要因としては、コース制の導入やオーダーメイド教育において学生が望む学びと希望した就職が達成できたものと考えられる。

### 【今後の課題】

以上から、本学部の教育課程・カリキュラムのありかたについて、おおむねその適切性は確保されていると考えられる。

しかし、社会福祉養成カリキュラムの見直しが課題となっており、これについては、令和2年度における改正を起点とした本学部におけるカリキュラム編成、検証の過程で、さらなる改善を図ることとする。

## 2. 教育課程・カリキュラムに関する点検・評価

### はじめに

本学部の教育課程・カリキュラムのあり方について、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）を踏まえて検証する。

### 2-1. カリキュラム・ポリシーと教育課程・カリキュラムについて

はじめに弘前学院大学のカリキュラム・ポリシーは、「神を畏れ敬い人を愛する心「畏神愛人」をスクールモットーとして、人間性豊かな人格の完成を目指し、文学・福祉・看護に関する高度な専門性を意欲的に追求し、地域や国際社会に貢献できる人材を育成するため、全学共通の礼拝、リトリート、キリスト教学、ヒロガク教養講話、基礎演習等を基盤に、各学部学科の専門教育科目を適切に配置し、各学部とも前期・後期には形成的評価、最終的には総括的評価を進め、それらの結果を学生個々に反映するとともに、それぞれの教育目標や学生のニーズに合わせた体系的カリキュラムを編成している。

上記の本学のカリキュラム・ポリシーに則り、社会福祉学部のカリキュラム・ポリシーを次のように策定している（資料1）。

第一は、入学者一人一人が考え、自ら行動することを通じて様々な生活課題を有する人や様々な課題を抱える地域を理解し、社会福祉および関連領域の知識や技能を総合的に活用しつつ、他者とも協力してその問題を解決していくための資質や能力を体得できるような教育課程を編成している。

第二に、社会福祉実践コースでは、支援を必要とする人の生活やこころを深く理解するとともに、福祉政策や制度、インフォーマルケアを含む社会システムとの連携など、具体的支援のための方法を熟知した、福祉実践者である社会福祉士または精神保健福祉士を養成できるよう科目を設定している。

第三に、人間科学コースでは、人間関係を築くためのコミュニケーション力や問題解決力、リサーチ力を身につけ、現代社会の課題である「共生社会」形成の担い手として、福祉領域に限らず、広く社会で活躍・貢献できる人材を育成するための科目を設定している。

第四に、社会福祉学における基本的知識、教養的知識に始まり、年次進行に従い社会福祉の専門的知識が醸成されるように順序立った科目を構成している。

以上から社会福祉学部では、建学の精神である『畏神愛人』（人間尊重）の立場から「子どもからお年寄りまであらゆる人が抱える生活課題や地域で生じる課題に強い関心を持ち、その問題解決のために必要な専門知識を身につけた人材」と「福祉に限らず広い知識と思考力を身につけ『福祉マインド』をもって社会に貢献できる人材」を育成することを目的とし

たカリキュラムを展開している。

## 2-2. カリキュラムの編成と授業科目の配置 (資料2)

社会福祉学部のカリキュラム編成は、次のような特色を有する。

第一の特色は、学生一人ひとりに寄り添ったオーダーメイドの実践である。これは幅広い視点に立って社会に貢献できる人材を養成するために、一人ひとりの学生に寄り添い、学修ニーズに対応した講義や演習を設定している点である。学生主体の学修形態、思考の活性化を図り、活動を通して自分のものにする「アクティブラーニング(主体的・対話的で深い学び)」にも力を入れている。

第二の特色は、1年次において、いかに社会福祉を学ぶかを基礎ゼミナールで学ぶことである。2年次では、ソーシャルワーク(相談援助)の様々な理論を学びながら、実践現場での援助や支援の仕方を学んでいる。

第三の特色は、3年次に行われる演習・実習教育の充実である。3年次では、専門的な学びのために学生自身の設定した課題追究を行う専門演習や、地域包括支援センターや医療機関相談室、市町村社会福祉協議会、社会福祉施設などでの実習を通してソーシャルワークの実際を学ぶ点である。

第四の特色は、2016年度から始まったコース制である。一つは、社会福祉実践コースであり、ここでは社会福祉士や精神保健福祉士を目指して、社会福祉専門科目を深く学ぶことができる。もう一つは、人間科学コースであり、ここでは福祉マインドを持って一般企業や公務員等の各分野において貢献できる人材を育成している。コース制導入に伴い、心理・コミュニケーション・健康スポーツに関する魅力的な科目を新設した(資料3)。

科目配置、系統関係については、社会福祉学部のディプロマ・ポリシーを具体的に実現し達成可能になるような形で構成している。大別すると「基礎教育科目」・「社会福祉学支援科目」・「社会福祉専門科目」となるが、コースによって卒業所要単位が異なっており、社会福祉実践コースにおいては、「基礎教育科目」10単位、「社会福祉学支援科目」50単位、「社会福祉専門教育科目」70単位、計130単位であり、「人間科学コース」においては、「基礎教育科目」10単位、「社会福祉学支援科目」70単位、「社会福祉専門教育科目」50単位、計130単位となる。

こうした授業科目の配置は履修系統図(カリキュラムマップやカリキュラムツリー)として可視化している。

## 2-3. 点検・評価 (資料4) (資料5)

学修成果の点検・評価にあたっては、進路(進学、就職)の選択、卒業時アンケートにより、学部教育の達成度を多角的に評価した。実際に「2011年度から2018年度の卒業生を対象」、「2018年度の卒業生を対象」、また2017年度、2018年度の新入生を対象とした「新入生リトリートの実施による建学の精神の学び、学習支援の効果に関する調査分析」(資料

6)、2018年度社会福祉学部「カリキュラムに関するアンケート」(資料7)の集計結果報告書から学修行動・学修成果の結果が得られている。

## 2-4. まとめと課題

社会福祉実践コース・人間科学コース制導入後、初の卒業生による受験成績が急上昇した。それは国家試験対策委員会による抜本的な受験対策の改善と学生指導の結果として合格率が急上昇したことを評価された。これに続いて国家試験受験だけに価値観を置かず、一般企業での就職を目指してインターシップに勤しんだ学生、公務員や教職採用試験に集中した学生が少しずつではあるが多くなってきた影響もあるものと指摘したい。人間科学コースの誕生でもたらされた効果も出ていると考えられる。

これらのことからコース制の導入やオーダーメイド教育において学生が望む学びと希望した就職が達成できたものと考えられ、おおむね適切性は確保されていると判断される。しかし、検証の過程で、なお次のような課題が見いだされた。

コース制を採用して、人間科学コースを設けたことで、多様な学修ニーズを持つ学生が入学してくるようになったことと、これまでと同様に社会福祉実践を深く学び、社会福祉士等の資格取得を強く願う学生が入学して来るという二極の流れが生まれ、この両者が相俟って幅広い資格取得を目指そうと期待される可能性が生じたことである。

これらの見直し案については、令和2年度において社会福祉養成カリキュラムの改正を起点とした本学部におけるカリキュラム編成を実施している(資料8)。

## 資料

- ① 2020年度シラバス
- ② 社会福祉学部カリキュラムの構成
- ③ 社会福祉学部コース制一覧表
- ④ 「2019年度 入試選抜方法の妥当性検証に関わる入学生の追跡調査(2011年度から2018年度卒業生対象)」
  - 「1. 入学者選抜に関する点検評価」の「資料②-1」と同。
- ⑤ 「2019年度 入試選抜方法の妥当性検証に関わる入学生の追跡調査 「卒業生の入試形態別国家試験合否、ドロップアウト、就職実績に注目して」—コース制導入初の2019年度(2020年3月)卒業生対象—
  - 「1. 入学者選抜に関する点検評価」の「資料②-2」と同。
- ⑥ (2017年度・2018年度)「新入生リトリートの実施による建学の精神の学び、学修支援の効果に関する調査分析」
- ⑦ 2018年度 社会福祉学部 カリキュラムに関するアンケート
- ⑧ 上掲⑦に同じ。

### 3. 教員組織に関する点検・評価（要約版）

#### 1) 実態・取り組み・達成状況

##### (1) 教員数の確保

学部開設（1999年）以来、教員数は20人ほどであったが、入学者が7、8年後から定員100人を割りはじめた。学生数が減り続けたので、4年前に入学定員を50名とした。教員数は、現在18名となっているが、教育体制を維持するにあたっての支障はない。授業時間数について、次年度からは、現在実習時間が180時間から240時間に増える。しかし同時に、これまで卒業単位数が多かったのを124単位まで削減し、教員負担を軽減することを目指している。

##### (2) 教員の質の向上と体制

教育の理念をテーマとしたFD研修会を引き続き継続する。

学生の学修成果と福祉実習の確認の必要性から、毎年実習後に実習体験の発表を教員と学生と現場責任者の前で行っている。一人の学生の発表が終わるごとに、前述した方々から、質問がなされる。かなり厳しい質問も出る。その後、発表原稿をもとに、各学生が修正し、実習記録の冊子を実習指導会議（社会福祉学部社会福祉学の教員と特別支援教育の教員）の編集のもと作成している。

#### 2) 課題・解決方策案

##### 【課題】

- (1) 学部で最も力を入れているのが、実習と国家試験への準備である。実習に参加できる条件は、学部のカリキュラムで決まっている。課題は実習に行くまでの学修（単位取得）のみならず、日頃からいかなる準備（例えば、ボランティア、サークル活動、アルバイトなど）にどのように学生に取り組ませるのか、教員で話し合う必要がある。もちろん、絶対的なものではなく、緩やかな指針のようなものを作成するという案もあろう。
- (2) もう一つの課題は、実習終了後から、国家試験までのモチベーションの維持である。

##### 【解決方策案】

- (1) 学部新戦略会議、実習指導会議等で時間をかけて、ゆっくりと話し合っていく。
- (2) もうひとつの課題は、3月の卒業生は、国家試験である社会福祉士の合格率が従来の3倍以上の合格率（64%）であった。東北の社会福祉学部・学科を有する大学の中で2番目という数字であった。国家試験前までの学修を担当した2人の先生をはじめとして、モチベーションを維持し続ける方法について先生方に聞くことから始めたい。



### 3. 教員組織に関する点検・評価

#### はじめに

現在の大学教育に求められているのは〈教育の質保証〉である。これが、教員組織のあり方について検討する際の基本的な観点となる。教員組織は、この〈教育の質保証〉を実現するための基盤的な体制であるが、本学部の教員組織の妥当性を検討するにあたって、さらに具体的な視点から、以下に述べたい。

- (1) 現状分析
- (2) 社会福祉実習までの学修とボランティア等との絡みをどのように考えるのか。
- (3) 国家試験合格までの学生のモチベーションの維持をどのように工夫していくのか。

#### 3-1. 現状分析

学部教員数は、学部開設（1999年）以来、教員数はそれほど変わっていないが、現状でも設置基準を満たし、教育体制の維持にあたっての特段の支障はない。

次年度からは、新しいカリキュラムとなり、実習時間が180時間から240時間に増え、卒業条件単位数を130単位から124単位に減らし、教員負担を軽減させる予定である。

#### 3-2. 社会福祉実習までの学修とボランティア等の絡みをどのように考えるのか

社会福祉学部は、開設当初から学生の間でボランティア活動が盛んである。カリキュラムの中に科目として存在しているわけではないが、当初から多くの社会福祉学教員からすると、ボランティア活動は、学生にとって不可欠なものだとみなされていた。社会福祉学部の学生は単に学修成績が良いだけではダメだと考えられていたのである。本学のボランティア活動のサークルを立ち上げたのは、社会福祉学部の学生であった。本学部の多くの教員・学生はボランティア活動を重視している。これを、できればカリキュラム上の科目の学修とボランティア活動が、どのように絡んでいるのかを学生自身が理解・説明できるようになれば、本学部にさらに、誇りがもてるようになるのではないかと。

多くの教員が、ボランティア活動については、それぞれの教員がその大切さについては話していよう。実際、ある授業でも、ボランティア活動や関連する新聞記事を印刷して学生に配り、授業時間が余れば、その記事を学生と一緒に読み、解説している例がある。

#### 3-3. 国家試験までの学生のモチベーションの維持をどのように工夫していくか

3月に卒業した学生の社会福祉士国家試験合格率は、64%を超えた。この合格率の高さは、本学部開設以来初めてのことである。単に合格率が高いだけでは良くないが、3-2で述べたように、福祉実習に行くまでは、学修とボランティア活動にできる範囲で取り組み、その

後は、国家試験の学修を中心としながらも、いくらかでもボランティア活動をしていければと思う。その時間的配分はそれぞれの学生に任せるしかない。こうした中でも学生の国家試験までのモチベーションの維持をどのように保たせていくのか。単純な答えはないであろうが、社会福祉士国家試験合格者を64%まで高めた2人の教員に昨年と今年の学生の状況を聞きつつ、それぞれの教員がいかなる助言をときおりすればよいのかを、ゆっくり、じっくりと話し合っていければと思う。

### 3-4. まとめと課題

社会福祉士国家試験合格者が社会福祉学部のすべてではない。だが、要は、合格率が一気に上がったのを本学部として活用・善用していくことが重要である。

単に数字を求めるのではなく、教員と学生の関係をさらによりヒューマンなものにしていくことである。

#### 【課題】

各教員が自らの科目を通じて、学生との距離を少しでも縮めていく努力を積み重ねていくことだ。ただ、この努力はほとんどの教員がすでに実行しているものと思われる。これから必要なのは、他の教員のそうした工夫の情報をどのように共有していくかであろう。簡単そうで、難しいことかもしれない。どの教員も理解できる方法から、その教員でないとならないものもあるかもしれない。教員同士が互いに良いことを認め合うことが必要になる。これが意外に難しいのかもしれない。この努力をゆっくりとじっくりと行っていきたい。

かりに、数年後合格率がかなり下がり、焦って、また数字のみを追っても、おそらく、うまくいかないだろう。それゆえ、そうならないうちに、本学部教員の地道な努力が不可欠となろう。

#### 4. 学修成果に関する点検・評価（要約版）

社会福祉学部の学修成果について、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を踏まえて検証した。

このディプロマ・ポリシーに基づいた教育が、どの程度実現されているか、その達成度の評価については、本学のアセスメント・ポリシーに基づいて行うものとする。

その評価指標としては、直接的評価および間接的評価があるが、前者の直接的評価については、「学位取得率」と「国家試験合格率」による結果を、また後者の間接的評価については、「就職率」および「学修行動・学習成果アンケート調査結果」による結果を示す。

その検証の結果、学部教育の目的は概ね達成されていると判断された。

しかしその一方、検証の過程で次の課題が見出された。

- ①退学者が毎年何名か存在し、減少傾向にはない。
- ②授業外での学修時間の少なさが問題である。

## 4. 学修成果に関する点検・評価

### はじめに

社会福祉学部の学修成果について、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を踏まえて検証する。

### 4-1. ディプロマ・ポリシーと学部教育の達成度について

以下に本学部のディプロマ・ポリシーを示し、その後点検評価を行う。

基礎教育科目、社会福祉学支援科目、社会福祉専門科目のそれぞれについて示された単位数を満たして総計130単位以上を修得し、次に掲げる能力を身につけたものに学位を授与する。

1. 様々な生活上の課題に対し、真摯に向き合い、あらゆる知識や技術を傾注し解決を図ろうとする人間性と創造性豊かなソーシャルワーカー等の福祉実践力を有している。
  - ・社会的視野を拡大するための知識を身につけている。
  - ・サービスを必要とする利用者の生活実態について正しく把握するための知識を身につけている。
  - ・社会福祉の専門職と呼ばれるにふさわしい知識と技術を獲得している。
2. 自らの力で学ぶための基礎知識及び専門にとらわれない幅広い知識を身につけ、また、それらを将来にわたって活用することができる。
3. 思考の柔軟性を持ち、論理的に考え、丹念に調べ、しっかり表現できるための基礎的能力と教養（知的関心）・学究的態度を身につけている。

### 評価

上記「1」については、1年次には、基礎演習Ⅰや社会福祉学支援科目等において、家族、地域の日常生活の諸課題から、関連する社会問題までを幅広く学習することになる。同時に基礎演習Ⅰにおいては、図書館の使い方、学修方法、文章の書き方などから、担当教員の関心ある上述した課題から問題までを少しずつ学んでいく。

2年次では、基礎演習Ⅱや3年次の社会福祉実習の基礎力を、社会福祉支援科目・社会福祉専門科目から学んでいく。同時に1年次で身につけた基礎力に、さらに磨きをかけていく。

3年次では、社会福祉実習の準備、実習、実習経験の発表、その記録を冊子にまとめていくというプロセスに入る。このプロセスの経験がかなり学生の知識を増やし、実践の難しさややりがいを大いに感じ、そしてそれらを記録し、文章化し、教員と学生の前で発表する。つまり、3年次では、「1」「2」「3」の理念を含んだ学修と実践を同時に重ねていくことになり、ほとんどの学生が人間としてかなりの成長を見せることになった。

## 4-2. 学修成果の測定およびその検証

2019年度卒業生について、その成果の評価を (a) 直接的評価および (b) 間接的評価において見てみる。

### (a) 直接的評価

直接的評価のうち、「学位取得率」と「国家試験合格率」の結果を示す。

- ・学位取得率は、88.8パーセント（入学生45人中、4人が退学、1人が留年）
- ・国家試験合格率については、社会福祉士64.7%（前年度までは数年間20%台）であり、また精神保健福祉士は100%であった。いずれも好成績であった。

このほか、2011～2018年の本学部の入学者追跡調査によれば、A0入試、推薦入試、試験入試、大学入試センター試験入試による形態別の卒業時の成績は、センター試験入試による入学者の卒業時の平均点が高く、A0入試による入学者の卒業時の平均点が最も低かった。これまでも、A0入試による入学者には、入学前にレポート課題の提出とそれを教員が添削するなど工夫をしてきたが、入学してからの動機づけの工夫など、新たな課題に取り組みねばならないと思われる。

### (b) 間接的評価

間接的評価のうち、「就職率」および「学修行動・学習成果アンケート調査結果」を示す。

- ・就職率は、これまでの数年間、100%か、これに近い状況が続いている。

就職先は、2019年度卒業生は、医療・福祉関係が55%、民間企業、公務員等である。

具体的には、芙蓉会、七峰会、紅屋商事、黒石市国民健康保険黒石病院、陸上自衛隊等である。

学修成果に関して、その背景となる学修に関わる行動について、学修への取り組みが課題となっている。

「学修行動・学修アンケート調査結果」によれば、本学部学生の学修に取り組む度がかなり低いことが判明した。

問12「授業に積極的取り組んだか」という取り組み度について、学生の自己評価を尋ねた質問では、社会福祉学部は「まったく取り組んでいない」4.1%、「やや取り組んだ」27.4%で、ともに全学の中で最も高く、取り組み度がかなり低い。

問13「授業の予習」について、本学部生は「やっていない」が35.6%で、取り組み度が全学の中で最も低い。

問14「授業の復習」について、本学部生は「やっていない」が34.9%で、これも取り組み度が全学の中で最も低い。

問 13 の予習と問 14 の復習は、事前・事後学修を定めた大学設置基準の「単位の実質化」に関わる課題である。本学は全体が低い達成度なのであるが、その中でもかなり低い。また問 15「授業に関わる発表、レポート、課題への取り組み時間」では、本学部生は「やっていない」が 5.5%、「90 分未満」が 22.6%で、これも全学の中で取り組み度が最も低い。今後は、学生の授業外での学修をいかに動機づけるかが重要になってこよう。

### 4-3. まとめと課題

おおむね目的は達成されていると思われる。

しかし、検証の過程で次の課題が見出された。

- ①退学者が毎年何名か存在する。
- ②授業外での学修時間が少ない。

①については、学生のみでなく、各教員ができる範囲で学生になんでもない声掛けをする。学生が相談に来たら、教員は丁寧に対応する。この問題には社会福祉学部は、長年取り組んできた。それゆえ、一方では、その成果はすでに出ていると言えようが、他方では、退学者がなかなか減らないことも事実である。

②では、かなりの学生は、ボランティア等、自主的な活動に興味を抱いたり、実際に活動している。この関心のある領域から、何とか授業外での学修時間を増やすことができないだろうか。

社会福祉学部の学生には、約20年前に学部が創立された頃から、ボランティアに取り組む学生が多いのも特徴である。私たち教員と同じく社会福祉の仕事でも、やはりボランティアな精神が不可欠である。もちろん、身体をこわすほどの動きすぎはよくないが。社会福祉学部の学生は、弘前市の6大学で取り組む「大学コンソーシアム学都ひろさき」のボランティアなどの活動にも積極的に参加している学生が何人もいる。

ボランティアを続けると、社会福祉関係の行動に非常に重要なコミュニケーション能力を向上させることになる。この能力には、完成はないし、目には見えにくいのが、ほとんどの業界で求められている。社会福祉学部の卒業生には、そうした能力の土台を築いていった者が多かったと言えよう。教員は、学生のこうした側面をできる範囲で応援したいものである。これからも学生の成長を見守りたい。

### 資料

- ① 弘前学院大学『社会福祉学部2020年度講義概要（シラバス）』  
→ 「2. 教育課程・カリキュラムに関する点検評価」の「資料①」と同。
- ② （再訂正版）「第32回社会福祉士・第22回精神保健福祉士国家試験結果  
について」社会福祉研究所 2020. 3. 13.
- ③ 「2019 年度 入試選抜方法の妥当性検証に関わる入学生の追跡調査 「卒業生の入試形態別国家試験合否、ドロップアウト、就職実績に注目して」一コース制導入初の

2019年度（2020年3月）卒業生対象—

→ 「1. 入学者選抜に関する点検評価」の「資料②-2」と同。

④ 「2018年度社会福祉学部 学生による授業評価アンケート」集計結果」

（社会福祉学部FD委員会 2019年9月）

⑤ 「2019年度 入試選抜方法の妥当性検証に関わる入学生の追跡調査(2011年度から2018年度卒業生対象)」

→ 「1. 入学者選抜に関する点検評価」の「資料②-1」と同。

## 5. 社会との連携・接続、社会貢献に関する点検・評価（要約版）

社会との連携・接続、社会貢献に関する社会福祉学部独自のポリシーについて、とくに明文化して策定はしていないが、大学が制定している社会貢献に関する方針に則り、社会福祉学部独自の社会連携・接続のあり方を追求してきた。

その具体てき実践として、地域の人たちとの交流、連携活動を行ってきた。

その結果を検証して、本学部の社会との連携・接続、貢献に関する目的は、おおむね達成されていると判断される。

### **【課題】**

しかし、検証の過程で、なお次のような課題が見出された。

それは、学生たちはそれぞれの活動を通して、その意義については学んだが、支援者としてみずからがどのようなかわりをすれば、利用者の支援の質を高められるかについては、必ずしも明確に自覚されているとはいえない点である。



## 5. 社会との連携・接続、社会貢献に関する点検・評価

### はじめに

本学部の社会との連携・接続、社会貢献について検証する。

#### 5-1. 地域活動の形態（資料①）

本学部は、地域の様々な分野の人たちと連携して、ボランティア活動をしてきた。

その主なものの歩みは次のようである。

- 1) 地域の自治会と話し合いながら、学生と地域の人が連携・協働することを目指してきた。
- 2) 地域の社会協議会と話し合いながら、学生と地域の人が連携・協働することを目指してきた。
- 3) 地域の福祉団体との話し合いのなかで、学生がより主体的に参加できる援助活動ができるようにしてきた。
- 4) 行政が行っている活動のなかで、学生が積極的に参加できる活動をさがし、それに果敢に挑んでいくように促してきた。

以上の観点から、本学学生はそれぞれの対象に向けて、情報の共有を図り、ネットワークを強化してきた。

まず第1に、情報発信と情報交換の充実を図ってきた。

次に、具体的な取り組みとして、地域の自治体、社会福祉協議会、福祉団体、幼稚園などに働き掛け、連携を強化し、そこから得られる情報をもとに交流作りを進めてきた。

そして、地域で活用できる仕組みを探し出し、それをどのように盛り上げていくか、話し合ってきた。次に挙げるイベントが2019年度の活動例である。

#### 5-2. 弘前ちょうちん祭り

このお祭りは弘前市西弘商店街にて毎年6月に開催されている夏祭りである。開催季節になると祭りの主催者と学生の代表が集まり、準備のための打ち合わせの会合を持った。そして、学生たちはその打ち合わせの内容に従って、自主的にプランを作成したうえで、機材の収集、料理材料の収集などの作業にあたった。そして、祭りの当日の一連の活動に参加し、収支決算までおこなった。このように学生たちは一連の作業を通し、地元の人たちと交流し、学生同士の絆を深めた。そして、参加者は参加した感想文を書き学校のHPに載せた。

#### 5-3. ミスター・ラージ

本学のサークルが主体となって、自閉症やダウン症の児童たちを対象にしたプログラムである。それらは各4部門に分かれている；「自己紹介ゲーム・ラポール部門」「工作活動部門」「SST部門」「レクリエーション部門」

参加した学生たちは皆、主体的に作業に当たり、利用者とのラポール作りに集中した。反

省点についても、学生たちは自覚的に発言しており、実践的な活動を通じた学びがあったといえよう。

#### 5-4. 紙芝居の実演活動

まず、絵の上手な学生がオリジナルのストーリーをもとにした紙芝居を作成した。いろいろな工夫、試行錯誤があり完成までに1年かかった。そして、紙芝居が完成したので、学校の近くの保育園たちに読み聴かせた。実演後、保育園の先生は、紙芝居のオリジナリティー、手作り感が子どもたちに直接つたわったと言ってくれている。実際の読み聴かせにおいても、口調が優しく、感情がこもっていた、との感想をいただいた。この活動を通して学生たちは子どもたちとの直接的な交流を体験する良い機会を持った。

#### 5-5. 地域におけるインクルージョン活動

まず、学生たちを対象に、地域のお年寄りの認知症の方々との接し方についての「認知症サポーター養成講座」を開いた。そして、「徘徊模擬訓練」をおこなった。参加した学生たちには；

- 1) おどろかせない
- 2) いそがせない
- 3) 自尊心を傷つけない

を学んでもらった。また、何よりも、利用者さんの受容が大切であることが確認された。

#### 5-6. hug work サティライト教育

ボランティアの学生たちは、障がい者就労支援事業所で製造した商品を販売支援する作業に当たってもらった。月に6回ほど学内で、パン、とうふ、プリン、ドーナッツ、キノコ、木工品、手工芸品を販売した。学生たちは、販売過程を通して、利用者とうまくコミュニケーションをとることが出来た。自然と人に触れあうことの大切さに気付いていた。また、障がい者就労支援の大切さについても実践的に学修している。

#### 5-7. まとめと課題

おおむね目的は達成されていると判断される。

しかし、検証の過程で、なお次のような課題が残った。

学生たちはそれぞれの活動を通して、その意義については学んだが、支援者としてみずからがどのようなかわりをしたら、利用者の支援の質を高められるかについては自覚されているとはいえない、今後の体験をとおして、学びの質を高めていきたい。

#### 資料

- ① 「社会福祉学部生の主体的学びの実践報告会」

以上